

## 雲 龍 寺

① 由緒 開山は、文禄元年（1592年）徳雲寺第9世白翁長伝大和尚で、その後徳雲寺第18世天巖大和尚の代に元有原から現在地に移転改築された。本尊は如意輪観世音菩薩（人々の悩みを全て救済する仏さま）で、奴可郡33ヶ所の第14番札所に当たる観音霊場である。

### ② 雲龍寺と小早川隆景公と牛供養

小早川隆景とは、毛利元成の三人の息子の一人であり、三矢の遺訓で知られているが、関ヶ原の戦いに破れるまでは西国を統治する武将として父元成とともに天下に名をはせていたが、何故か伯耆では牛馬の守護神として祀られている。

明治16年、日野郡自照寺から小早川隆景の石版画と愛用の重藤の弓を分霊として持ち帰り、村の牛馬の守神としてお堂に祀ってある。分霊後70年目にあたる昭和27年には大仙供養田植が大々的に行われたが、八幡地域では最後の牛供養田植となってしまった。

### ③ 愛宕山 新四国八十八箇所

雲龍寺の裏の愛宕山には、明治9年に勧請した新四国八十八箇所があり、地域の人が管理されており、番号を付した石仏を順番に巡ることができる。頂上は見晴らしが良く、森地域をはじめ白滝山や道後山が望まれる。

#### 四国八十八箇所霊場とは

今から1,200年前、弘法大師（平安初期、わが国真言宗の開祖・四国讃岐（香川）の人・三筆（嵯峨天皇、橘逸勢）の一人）が42歳のとき、人々の災難を除くため修業に努め開いた霊場が四国八十八ヶ所霊場。弘法大師の修業の遺跡である霊場を巡拝（総行程1,400km）すること（遍路という）は、大切な修業であった。遍路は、煩惱（人の心を惑わし、悩ませ、苦しめること）と菩提（悟りをひらくこと）の旅でもあり、「煩惱即菩提」と言われた。遍路は、阿波（徳島）の1～23番霊場で、脚をしっかりと固める「発心の道場」から始まり、土佐（高知）の24～39番霊場で心を落ち着ける「修業道場」、そして伊予（愛媛）の40～65番霊場は信に入って悟りを開く「菩提道場」、そしていよいよ讃岐（香川）の66～88番霊場では諸願成就する「涅槃道場」です。最後は、高野山奥の院に参拝して大願が成就すると言われていています。



霊場から見た山並